滋賀文化財だより
NO. 120
1987. 10. 30
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

148. 中畑遺跡の調査

1. はじめに

中畑遺跡は、草津川改修事業に関連した草津川用水管移設の事前調査として発掘調査が実施された。調査期間は昭和61年12月10日～12月25日であった。

当遺跡は草津市西矢倉二丁目に所在する。東は東海道本線、北と西は条里に添って直角に曲って流れる伯母川に囲まれた水田の下に眠っている。南東には矢倉古墳群があり、西に位置する谷遺跡は古墳～平安時代の集落跡で、掘立柱建物や須恵器・土師器などが検出されている①。また、当調査地区の南に隣接した地区では、昭和60年・61年度の発掘調査によって、古墳時代の竪穴住居や平安時代の掘立柱建物・井戸・溝・土壙などが検出され、須恵器・土師器などの遺物が出土している②。周囲には、南平遺跡、坊主東遺跡、矢倉口遺跡など奈良～平安時代の掘立柱建物を多く検出した遺跡が多く、この時期の遺構、遺物が検出される可能性が高いと考えられた。

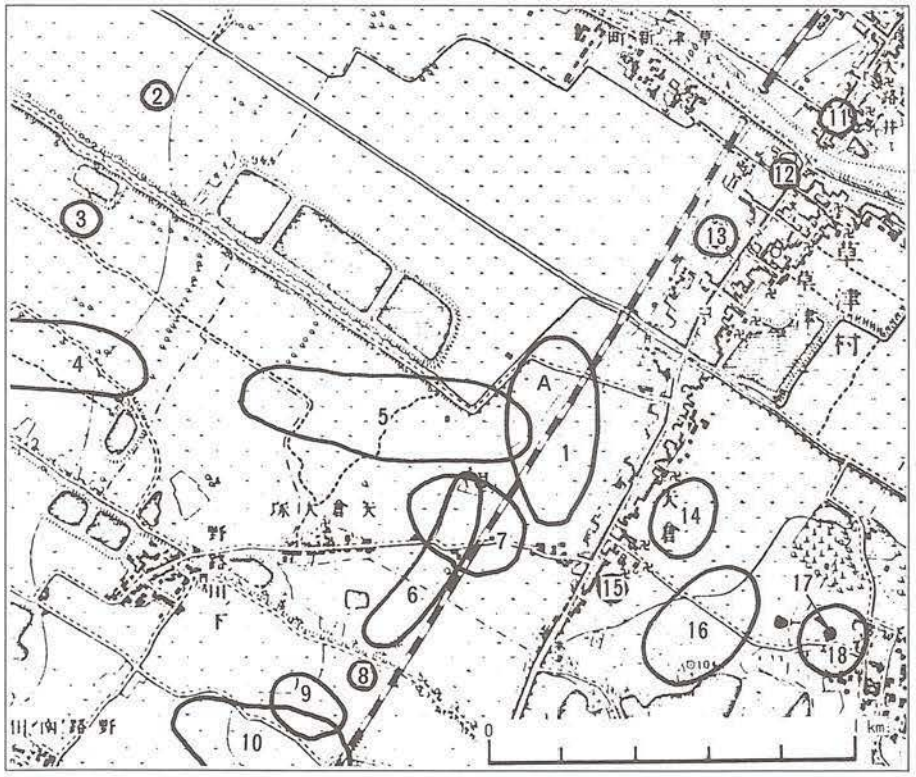
トレンチは、一辺10m×10mの桝形部分と、そこから東にのびる幅5m、長さ50mの送水管部分の計350㎡を対象として設定された。現地表面下約30cmで明黄褐色粘質土層が露出し、そこに暗茶褐色粘質土を埋土とする遺構が検出された。

2. 遺　構

遺構は桝形部分に集中して発見され、送水管部分の東側約3分の2からは検出されなかった。掘立柱建物1棟と、それに関連すると考えられる柵一条、そして溝1条と、多数のピットが検出されている。

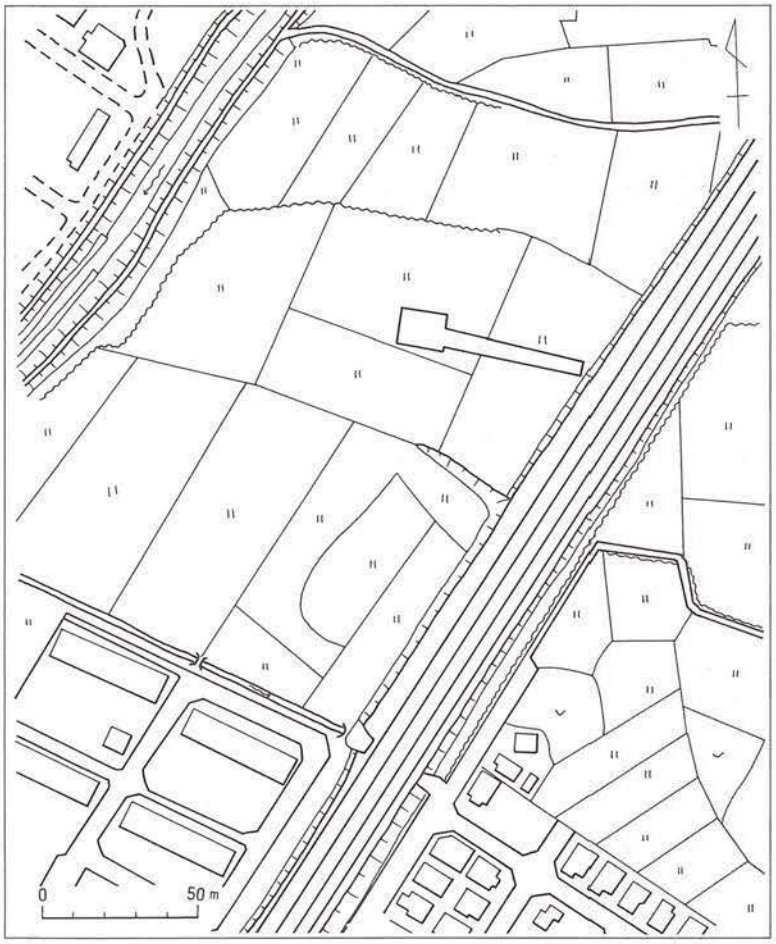
掘立柱建物

東西3間(4.6m)×南北3間(4m)の磁北より72～75度東へ振った東西棟建物で、柱間は1.2～1.8mを測る。柱穴は直径40cmの円形を呈するものや、長辺80



A. 調査地点
1. 当遺跡
2. 中兵庫遺跡
3. 墓ノ町遺跡
4. 襖遺跡
5. 谷遺跡
6. 矢倉古墳群
7. 大塚遺跡
8. 金鉄落遺跡
9. 片原遺跡
10. 野路岡田遺跡
11. 大路井城跡
12. 草津宿本陣
13. 草津城跡
14. 南平遺跡
15. 坊主東遺跡
16. 矢倉口遺跡
17. ヘソ塚古墳
18. 岡田追分遺跡

遺跡位置図



トレンチ位置図

cm、短辺40cmの長方形を呈するものなど様々であった。深さは20～30cmを測る。

柵

掘立柱建物の西約４ｍの位置に南北方向に並んでいる。方位は磁北より約16度西に振っている。長さは11ｍを測り、柱間は 2.5～３ｍであった。柱穴は５個確認できた。一辺30～40cmの方形のものや、直径30cmの円形のものがあり、深さは20～30cmを測る。

溝

掘立柱建物と重複し、その柱穴を切って掘り込まれている。北東～南西に流れる形状を呈している。両端は調査地区外であるが、長さ７ｍ以上、幅30～60cmで、中央部分が浅くなり、深さは10～30cmを測る。

ピット

直径20～40cmの円形のものや、一辺20～40cmの方形を呈するものがあり、深さは10～30cmを測る。

３．遺　物

遺物は、全体的に出土量が少なく、また摩滅が著しいものがほとんどであったので、詳細に観察し得なかった。

掘立柱建物

柱穴の埋土に伴って古墳時代～平安時代の土師器・須恵器・灰釉が数十点出土している。

１は須恵器杯身の高台部分で、底部外周から少し内側に断面長方形の高台が貼り付けられている。

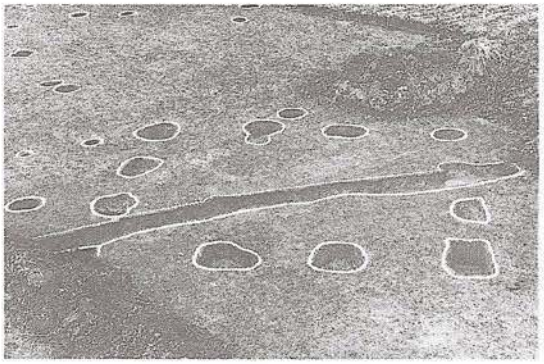
柵

柱穴から土師器・須恵器の小片が十数点出土しているが、実測できるものはなかった。土器の年代は、奈良時代を最新としている。

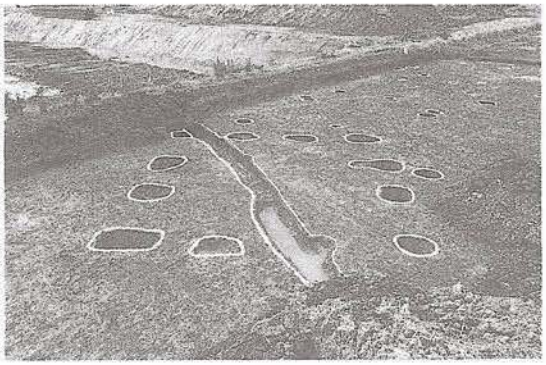
溝

埋土から古墳時代～平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉が数十点出土している。

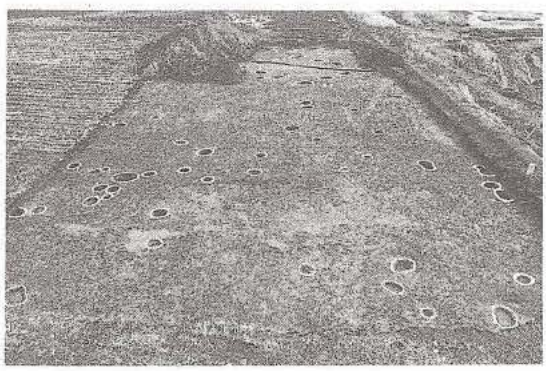
２は土師器椀の底部に断面三角形の高台が貼り付けられたもので、外面の高台内を除きヨコナデを施して



掘立柱建物（南から）



掘立柱建物（東から）



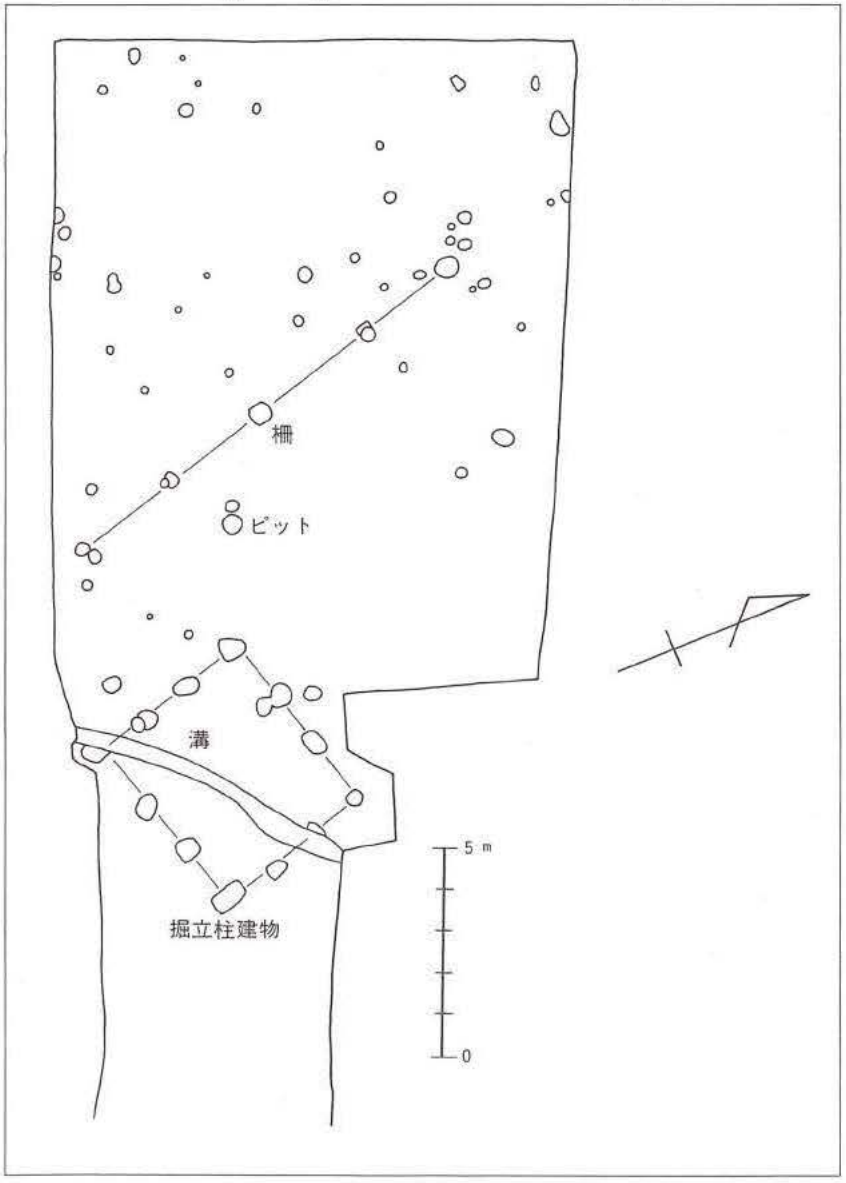
全　　景

いる。

3は黒色土器の椀である。薄い底部に断面三角形の高台がやや外方へふんばる形で貼り付けられている。調整は摩滅が著しく不明である。

4は須恵器杯身の口縁付近の破片である。浅く立ち上がる口縁部から、やや斜め上方に受け部が短くのび、立ち上がりも短めに内上方へのびている。全体にヨコナデ調整が施されている。

5は須恵器の鉢と考えられる。内彎する口縁部は端部で内傾する平面をもつ。外面には沈線が二条施され、その上下にカキ目調整が行なわれている。口径22.7cmを測る。



遺構実測図

他に図示できなかったが、緑釉の輪花椀の破片が1点出土している。

ピット

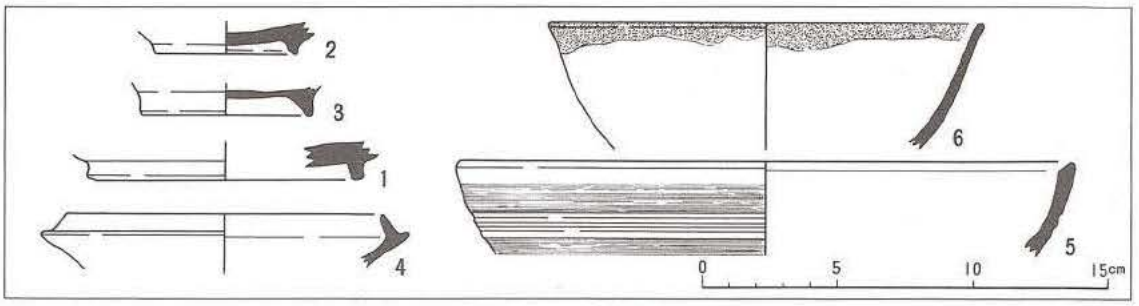
いずれも奈良時代～平安時代の土師器・須恵器・緑釉が数十点出土している。

6は緑釉の椀である。掘立柱建物と柵の間に掘られたピットから出土したものである。口径15.8cmを測る大形の椀で、体部から口縁部にかけてゆるやかに内彎し、端部付近で少し外反させている。端部は丸く収めている。内外面に施されていたと考えられる緑釉はほとんど剝落しており、素地の明褐色部分が露出している。口縁部の内外面には煤状の物質が付着している。

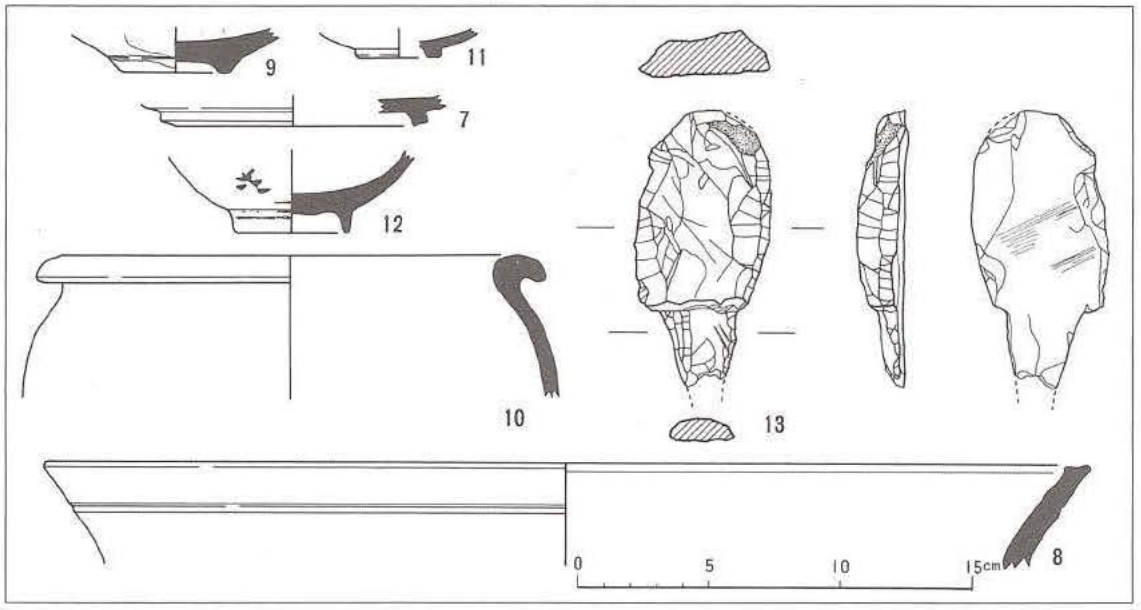
包含層及び耕作土

古墳時代から近現代に至る土器・陶器・磁器・石器が出土している。

7は須恵器杯身の高台部分で1に似ている。8は同じく甕の口縁部の破片であろう。9は京焼風陶器の椀底部、10は明治頃の陶器の甕の口縁部、11は唐津産の磁器の椀か皿の底部のいずれも破片である。12は染付椀で高台部分を除き、底部の完存したものである。13は用途不明の石製品である。



遺構出土土器実測図



包含層出土土器実測図

長さ10.6cm以上、最大幅5.3cm、厚さ1.6cmを測る。平面形は槍の頭状を呈し、表面は両側辺を細かく削って調整している。また裏面は平らで調整痕が認められず、断面はほぼ台形を呈している。重さは 109.3g以上である。

4．まとめ

今回の調査では、掘立柱建物1棟、それに伴うと考えられる柵1条、さらに溝1条と多数のピットが検出された。それらは、現水田面下約30cmという浅い所で発見されたにもかかわらず、比較的良好な状態で保存されていた。しかし、埋土、遺構面ともに粘土質であるため、土器の遺存状態は極めて劣悪であり、器表面が剥離したり著しい摩滅をうけているものが多く見られた。また、出土した土器も小片が多く、もとの器形を想定するのが困難であった。

遺構の年代は、先後関係の見られる掘立柱建物と溝に平安時代の遺物が出土している。また、南に接した地区では5～6世紀の竪穴住居と9～10世紀の掘立柱建物や井戸等が検出されており[3]、当遺跡で検出された掘立柱建物は、Ⅰ群とされているグループと同方位を呈するもので、それらとの関連性が考えられる[4]。

遺構の広がりは、調査地区の西～北側に向って延びていると考えられ、現在かなりの面積が水田として保存されている。関連性を持つ遺構の発見は、今後の調査に期待されることになるであろう。

（三宅　弘）

注

1．滋賀県教育委員会　『滋賀県遺跡地図』
　昭和61年　24ページ
2．藤居　朗　「中畑遺跡発掘調査概要」（『草津の古代を掘る』　昭和61年度草津市遺跡発掘調査報告会　草津市教育委員会　昭和62年）
3．2に同じ
4．小宮猛幸　「第Ⅳ章　中畑遺跡発掘調査概要報告」（『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書』Ⅰ　草津市文化財調査報告11　草津市教育委員会　昭和61年）